



よもやま話に花が咲く。えきんぐらがお届けする小ネタ袋。

蔵通信

十三号
2008.6

発行：絵金蔵運営委員会
発行日：2008年6月1日
〒781-5310
高知県香南市赤岡町538
Tel.Fax 0887-57-7117
ekingura@mxi.netwave.or.jp
http://www.ekingura.com/

シリーズ
絵金百話
第十二話 語りつがれる伝説



INFORMATION

☆ 須留田八幡宮の宵宮祭り

江戸時代末期から続く須留田八幡宮の神祭。氏子の家の前に十七点の芝居絵屏風が並びます。にぎやかな絵金祭りとは違い、ゆらめく蠟燭の炎が静かに芝居絵を照らす伝統の祭り。ゆっくり絵を御覧になりたい方におすすめ。

日時 七月十四日(月)、十五日(火) *日没より
場所 赤岡町本町商店街
駐車場 香南市商工会・赤岡保健センターほか

☆ 第三十二回 絵金祭り

今年も祭りの季節がやって参りました。年に一度、この時に限り、赤岡町内の芝居絵二十三点が各所蔵者の家の軒先に並びます。屋台あり、歌あり、賑やかに、鮮やかに屏風絵が勢ぞろい！是非、お越しください。

日時 七月十九日(土)、二十日(日) *午後六時より。但し、芝居絵が並ぶのは日没からです。
場所 赤岡町本町・横町商店街
駐車場 香南市商工会・赤岡保健センター・ボートピア土佐ほか

☆ 土佐絵金歌舞伎伝承会 歌舞伎公演

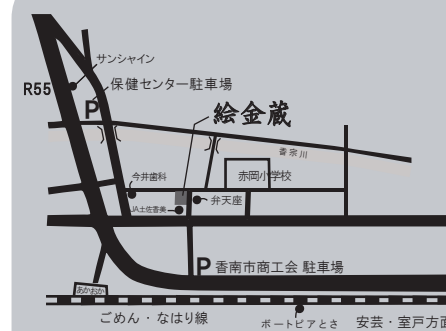
日時 七月十九日(土)、二十日(日) *絵金祭当日
午後五時開演
演目 浄瑠璃式三番叟、白浪五人男、菅原伝授手習鑑
料金 無料・全席自由
交通 ごめん・なはり線「あかおか駅」より徒歩五分
駐車場 赤岡保健センター・香南市商工会ほか
電話 弁天座(〇八八七五七三〇六〇)

絵金祭り期間中 催しのお知らせ

絵金蔵夜間開館	7 / *14・15 7 / 19・20 9時〜17時 (一時閉館) 18時〜20時 (19時半入館締切) *14(月・通常休館日)は 昼夜とも開館致します。	白描展	香我美町吉川氏所蔵の絵金の白描画数十点を絵金蔵土間ホール等にて展示します。 (通常入館料のみ)	語り部講座	蔵長横田恵が芝居絵の解説を行います。 (通常入館料のみ)	蔵の穴特別展示
---------	---	-----	--	-------	---	---------

〔絵金蔵〕

開館時間 午前9時〜午後5時
(入館は午後4時半まで)
観覧料 大人500円、高校生300円
小・中学生150円
(15名以上の団体は各50円引き)
休館日 毎週月曜日
(月曜が祝日の場合は火曜)
12月29日〜1月3日



絵金蔵の三つの使命

年に一度
：絵金の文化を
守るため
伝承
：次の世代へ
伝えるため
縁結び
：地域を超えて
世代を超えて

幕末土佐の芝居絵師・金蔵(通称・絵金)。彼は土佐各地の祭礼に多くの芝居絵屏風を残しました。絵金蔵は、平成17年2月、赤岡の地に残る23点の芝居絵屏風を収蔵・保存するために作られた施設です。



ようこそ、Deepな赤岡へ。赤岡っ子に愛されるおいしいモノの物語。

ドッリつかって
分かったニャア…
by まりも

塩と歩んだ餅屋のはなし

♪ さんぽさんぽ おとまり
赤岡の市で 塩買うてねぶらしょ ♪



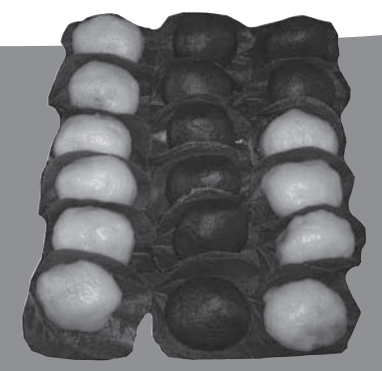
かつて製塩業が盛んであった赤岡には、こんな童謡が伝わっています。
「塩屋餅店」はその屋号の通り古くは塩を商う問屋でした。一代で身上を築いたという塩屋の主人は赤岡でも指折りの商人で、商売敵をうならせるほどの簡略（節約）ぶりだったとか…（『よりぬき土佐落語 4 続ひょうげ話集』高知新聞社）。その販路は北の山間部から、海を越えた上方にも及びました。最近では塩市が立ったというこの海辺の塩屋餅店周辺と、徳島県境に近い山間部の香美市物部町大柄を結ぶ塩の道が注目され、研究会やウォーキングツアーが行われています。

現在は餅の製造、卸を営む「塩屋餅店」。昭和 36 年ここにお嫁に来て以来お餅を作り続けている浜田満納さんに何うと、ご主人のお祖母さんの時代、塩を運んでいた廻船が転覆し積荷を失ったことをきっかけに、塩の商いと並行してお餅作りをはじめたようです。

満納さんが作るお餅やお饅頭はお舅さんに習った伝統の味で、添加物を使わないシンプルなもの。
餅つきを機械で行うほかは全て手作り。市販のものに比べるとぐっと甘さ控えめで、天日塩がきいたアンコともっちりした皮の組み合わせは「塩屋」ならではです。甘党も辛党も一度つきたて、蒸したてを食べればきっとやみつきに…。店頭販売はしていませんが、サンシャイン香南店（国道 55 号沿い）の地場産品売り場で購入できます。どうしても食べたい方は「塩屋餅店」までご予約を。



研究熱心な満納さん。
季節によって変わる饅頭は
黒糖、ココア、抹茶、りんご…
酒粕の入ったおり酒饅頭は絶品。
その他にもしば餅、かしわ餅、ホシカ餅、
大福は苺はもちろんキウイ、バナナ、トマトまで！



先代から使っている木型



ミラクルな饅頭
‘恐竜の卵’
紫芋とベーキングパウダー
のマジックで生まれました。

Vol. 1

赤岡のソウル・フード

塩屋餅店



問い合わせ先・塩屋餅店
〒781-5310 高知県香南市赤岡町北町 308 - 2
TEL0887-54-3722

絵金百話

第十二話 語りつがれる伝説

勢州阿漕浦 平次住家

せいしゅうあこぎがうら

へいじ すみか

勢州阿漕浦

平次住家

＜ 概 要 ＞

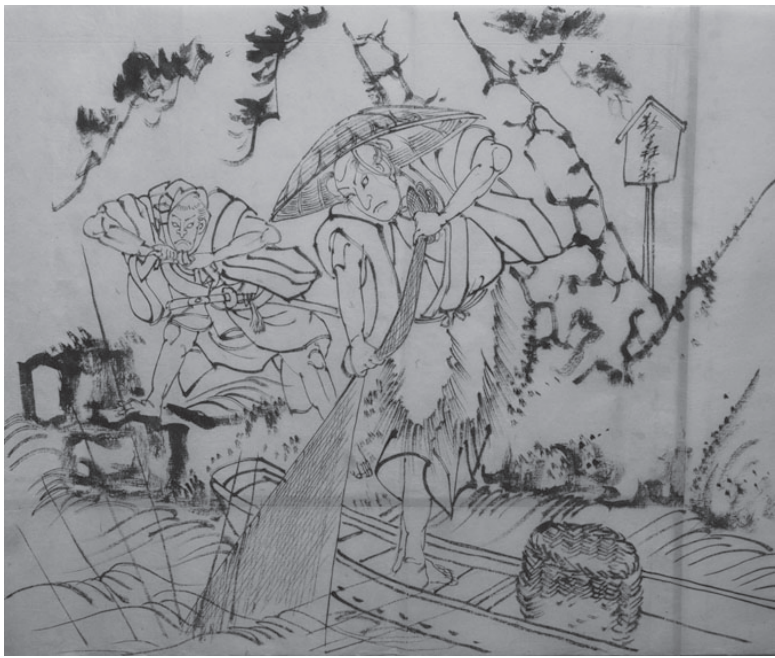
「勢州阿漕浦」は寛保元年（1741）9月、大阪・豊竹座初演の「^{たむらよるすずかかつせん}田村麿鈴鹿合戦」四段目を独立させ、改名した時代物の人形浄瑠璃。早くは寛政10年（1798）正月、江戸・土佐座で「祇園祭礼信仰記」の付け物として上演されました。作者は「田村麿鈴鹿合戦」の作者浅田一鳥、豊田正蔵と目されています。

阿漕浦は三重県津市の東方一帯の海岸の名で、この地にまつわる伝説や和歌は、現在“あこぎな商売”など、やり方があくどいさまに用いられる‘あこぎ’の語源といわれています。その伝説とは伊勢神宮に供える魚をとるため禁漁となっていた阿漕ヶ浦で、ある漁夫がくり返し禁を犯したため捕えられた、というもの。平安時代の和歌集『古今^{こきん}和歌六帖』には「逢ふことをあこぎの島に曳く鯛のたびかさならば人も知りなん」と見え、軍記物『源平盛衰記^{げんへいせいすいしき}』にも「伊勢の海あこぎが浦に引く網も度重なれば人もこそしれ」とあり、度重なることの比喻に‘あこぎ’が用いられています。この話はさらに謡曲「阿漕」や能の「阿漕」、御伽草子『阿漕の草子』や古浄瑠璃「あこぎの平次」など古代から近世まで文学や芸能の世界で連綿と語り継がれてきました。

本作の時代設定は8世紀、桓武天皇に仕える坂上田村麿と、三種の神器を奪い天下を覆そうとする藤原^{ちかた}千方の攻防が物語の柱となります。平次住家の段では坂上田村麿の臣桂平次清房が田村麿の娘春姫と恋に落ちたためその不興をかい、母と春姫を連れて伊勢の阿漕ヶ浦に隠れ住み、漁師となっています。平次はこの地で母の病に効く魚をとるため禁漁区に網を入れ、魚のかわりに宝剣を手に入れます。この宝剣が実は奪われた三種の神器のうちのひとつで、網を入れる平次の様子を覗き見ていた平瓦治郎蔵に奪われそうになりますが、治郎蔵が実は平次の父の家臣であったことが分かり、治郎蔵が禁を犯した平次の身代わりとなります。この後平次夫婦は上京して田村麿に宝剣を渡し、三種の神器がそろったところで逆賊たちを討ち滅ぼしたのでした。

赤岡町本町一区の屏風絵「勢州阿漕浦」は抜き身を持つ治郎蔵とキッと睨みつける平次、必死に彼らを止めるお春、それを覗き見る庄屋彦作…それぞれの心中が画面のなかで絡み合い、さらに禁漁を犯した過去と暴かれる現在、その緊張をあざ笑うかのような彦作の首が語る未来が交錯しています。本作もまた、絵金らしい遊びと工夫に満ちています。





① 勢州阿漕浦 平次住家
紙本墨画／香我美町・吉川登志之氏所蔵

阿漕浦で網をかける平次と背後から覗き見る平瓦治郎蔵のスケッチ。「勢州阿漕浦」の一連の場面を描いた以下の白描画は全て香我美町吉川家に伝わるものですが、次頁の屏風絵とはタッチや構図が異なり、絵金派の絵師の一人によって描かれたものと考えられます。



① 勢州阿漕浦 平次住家
紙本墨画／香我美町・吉川登志之氏所蔵
平瓦治郎蔵と首根っこをつかまれる庄屋彦作。

自刃した平次の母と、嘆く平次、お春、息子友石。
勢州阿漕浦 平次住家
紙本墨画／香我美町・吉川登志之氏所蔵



① 勢州阿漕浦 平次住家
紙本墨画／香我美町・吉川登志之氏所蔵
宝剣をめぐる争う平次と治郎蔵、そこに割って入る平次の妻お春、お春にしがみつく友石。



勢州阿漕浦

素描

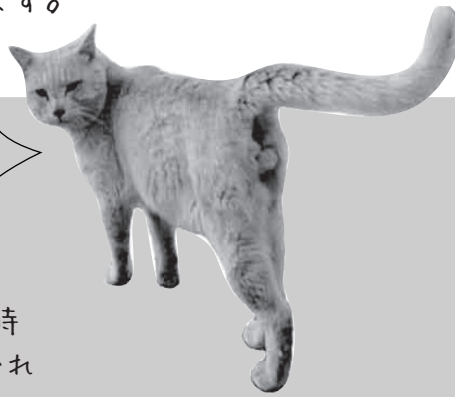


絵金蔵がで・き・る・まで★

partⅣ 「津軽三味線 in 米蔵」編

平成17年2月11日にオープンした絵金蔵はまだ3歳と4ヶ月。ここに至るまでには話せば長い道のりがありました……。まちづくりをめぐる、さまざまなディスカッションを重ねてきた地域の人々のユニークな試みを紹介します。

津軽三味線
ききたかった
ニャ〜



第13回 「津軽三味線 in 絵金蔵」

平成15年1月

赤岡に残る古い建物を活用して何か楽しいことをしようとはじまった「旭湯お喜楽演芸場」の赤岡町江見町にあった旭湯や、当時まだ農協の米蔵だった絵金蔵で、一風変わった楽しい催しが開かれました。絵金蔵でも、当時の温かい雰囲気を受け継ぎながら、新しい試みを続けています。

米蔵時代



米蔵での津軽三味線コンサートの模様。
壁には水彩画を展示しています。

絵金蔵になってから



現在も絵金蔵の「間と絵金」展示室で行われるコンサート。左右の壁面はほぼ米蔵当時のまま。



町のおかみさんたちによるカウンターバー。



現在もイベント時に開くカウンターバー。
天井の梁の一部や右側に見える会場入口の漆喰壁も左の写真の頃と変わっていません。

